

日中文化の架け橋として活躍する中国人画家の王伝峰さんと、建築家の隈研吾さん、写真家・篠山紀信さんの三人がコラボレーションした写真集「The Art of Bamboo 餘香 王伝峰 插花芸術」(講談社)が、九月末に出版された。

この写真集は、隈さん設計の建築物を舞台に、王さんが竹かごを使った插花(生け花)を行い、篠山さんがそれらの風景を写真に収めるというもの。王さんからの依頼を受けて、ぼくはその制作プロセスを映像に記録し、短篇映画として、出版パーティーの場で披露した。

本の装丁はアートディレクターの中島英樹さん、映画音楽は坂本龍一さんと、豪華な布陣。出版関係者によると、1冊3万円もするこのような写真集の企画は、いまの時代には珍しく、篠山さんも「ぼくが出す本でも、こんな立派なものはない」と目を丸くしていた。

今回、短篇映画を作る過程でもっとも印象深かったことは、自然と建築の境界線のデザインを重視する限作品の源流を見られたことだ。

例えば、撮影舞台の一つとなった熱海の隈作品「水／ガラス」(1995)。JR熱海駅からほど近い丘陵地にあり、ホテル「ATAM I 海峯楼」として営業している。建物にはガラスを多用し、部屋に入ると、眼前に大海原が一気に広がる。相模灘、初島を眼下に望む眺望は絶景のひと言。竣工から丸20年経っているが、行き届いた手入れもあり、いまもって古びてはいない。

境界線のデザイン

部屋の外には、大きな水盤で作られた「縁側」のような「ウォーターバルコニー」があり、水を通じて、複数の部屋が繋がっている。水盤には絶えず水が流れ、風によって水面が波打つ様は、海そのもの。水は建物の縁に向かって流れ落ちていく。目の前には水平線が開けて見え、大空と海と隈建築とが一体となって、見る者に迫ってくる。まるで、天空に存在するかのよう。自然と建

築の境界線をここまで縮められるのか、あるいは曖昧にできるのか、と圧倒される。フランク・ロイド・ライトの「落水荘」を彷彿させるような光景だ。この感覚は、その後の作品群にも連綿と受け継がれていく、隈建築のDNAでもある。

自然と建築の境界線をデザインし、このような開放感を生むデザイン感覚は、どこから生まれてくるのだろう。隈さんが米国留学中に惚れ

込んだというライトの「落水荘」も源流の一つだろうが、この「水／ガラス」のすぐ隣りに建つ、ある名建築からも、大きなヒントをもらった。

ドイツ人建築家ブルーノ・タウトが日本に残した唯一の建築作品「旧日向別邸」(熱海の家)だ。

といっても、通常の民家とは異なる。地上にある木造二階建の家屋は、「横浜ホテルニューグランド」や「銀座和光」「日比谷第一生命」などで

知られる渡辺仁氏が設計。タウトは、その上屋の日本庭園の真下にある「地下の離れ」の設計を依頼された。

母屋の一階から地下へとつながる階段を降りていくと、竹の格子を細やかに設えたエントランスが出迎えてくれる。タウトが設計した空間は、横に細長い長方形の形をしていて、大きく分けて三つの部屋で構成。手前から社交室、洋風客間、和室客間といった異なる性格が与えられている。一方で、共通点としては、どの部屋からも望める開放感いっぱい的大海原の絶景があった。

ライトの「落水荘」、タウトの「旧日向別邸」、隈さんの「水／ガラス」に相通することは、いかに自然と建築の境界線を心地よくデザインし、自然に開かれた空間を創造するか、という視座だ。

冒頭紹介した写真集においても、花々は建築作品のエッジに見事に生けられており、鑑賞する者に自然が自然と迫ってくる。建築が自然と出会う際をいかに極めるか、そこに建築の要諦があると言っても良いかも知れない。